

## 対話する平和ミュージアムへ

きみじま あきひこ  
君島 東彦

(国際平和ミュージアム館長)



問いかけひろば ポストイットの壁

国際平和ミュージアムが9月23日にリニューアルオープンして半年が経ちました。NHK、朝日新聞をはじめとするメディアの方々には9月から12月にかけてリニューアルについて丁寧に報じていただき、あつく御礼申し上げます。また、この間、ご来館いただいた見学者の皆様にも御礼申し上げます。

わたしはリニューアルされた国際平和ミュージアムのキーワードは対話であると考えています。平和ミュージアムは平和創造の拠点です。そして平和創造の重要な方法は対話です。わたしは対話する平和ミュージアムをつくりたいと考えています。

リニューアル後の平和ミュージアムでは、展示の全体にわたって、見学者への問いかけが散りばめられています。平和ミュージアムは「1つの正解」を提示するものではありません。見学者に考えてほしいのです。展示場の最後に問いかけひろばというスペースがあります。ここにはタブレットを使ってデータを表示する装置もありますが、見学者のみなさんは小さいメモ（ポストイット）に手書きで感想や意見を書いて、壁に貼り付けていってくれます。わたしはその全体に目を通しました。非常に興味深いです。個々の展示に対する感想というよりも、平和について見学者がどう考えているかが示されています。

ここでいくつかの見学者のコメントを拾ってみます。「即時停戦」（これはガザ危機に対するメッセージでしょうか）。「しっかり納税してそのお金を必要とする人々に分配すること」（富の再分配の必要性を述べた感想が多かったです。いまの競争社会、自己責任論の暴力性、つまり新自由主義的な世界の暴力性を指摘する感想は多いです）。「人は傷つけあうものだ」（なるほど。なぜそうなのでしょう）。「平和を実現させるには力が必要。いまは自衛隊を強化するべき」（確かにそういう考えもありますね。こんど対話しましょう）。「生きてるだけで幸せ」（わたしもそう思います）。これらはほんの一例ですが、

これからも見学者のみなさんの感想・意見を読むこと——見学者のみなさんとの対話——を楽しみにしています。

対話ということであれば、昨年12月23日に平和ミュージアム2階のピースcommonsで開催された「イスラエル/パレスチナ紛争をめぐる学生ピーストーク」について書いておきたいと思います。昨年10月7日以来のハマース等パレスチナ勢力とイスラエル軍との武力紛争は長期にわたるイスラエル・パレスチナ紛争の新段階であり、ガザの人々は人道的危機の状況（ジェノサイド的状況）におかれています。これをうけて国際平和ミュージアムは11月15日に緊急WEBセミナー「ガザでいま何が起きているのか」を開催しました。パレスチナ問題の専門家、パレスチナ支援をしている日本のNGOのスタッフを報告者に招いて、ガザ危機についての理解を深めました。このWEBセミナーには立命館大学の学生が多数参加していましたが、その中に問題意識の鋭い3人の学生がいて、彼女たちのイニシアティブで12月23日の学生ピーストークが実現しました。

当日は、役重善洋氏、ジェリー・ヨコタ氏らの専門家の報告の後、京都在住のイスラエル人、パレスチナ人の双方から報告をしていただきました。参加者は紛争当事者の声を聴いた後、小グループに分かれてディスカッションをしました。この学生ピーストークにはイスラエル人の研究者、大学院生、パレスチナ人の大学院生、米国のユダヤ系学生、それに中国からの留学生、日本人学生等、多様な参加者があり、当初予定の3時間を超えて4時間に及び熱心な議論がなされました。この学生ピーストークはリニューアル後の平和ミュージアムが取り組んだ最初の対話であり、また学生のイニシアティブで始まった企画というところも新たな方向性、可能性を示しているといえます。

ウクライナ戦争、ガザ危機はもちろんわたしたちの重大な関心事ですが、わたしたちにとってより切実な東アジアの国際関係は複雑な状況にあります。東アジア平和対話に取り組むのはわたしたちの責務であると考えます。このような課題も含めて、国際平和ミュージアムは平和創造の拠点としての役割を果たしていきたいと思います。みなさまのご支援をたまわりますように。



12月23日 学生ピーストークディスカッションの様子